

- is undoubtedly the true theory. "Origins of Attempted Secession," *The Collected Writings of Walt Whitman: Prose Works 1892*, ed. Floyd Stovall (New York: New York Univ. Press, 1964), II: 431.
- 11) 『世界大百科事典』23, (東京:平凡社, 1972, 1975).
 - 12) Emory Holloway, ed. *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman* (Gloucester, Mass: Peter Smith, 1972), 2: 267-268. ここには1776年8月27日にフォート・グリーンで起こったロング・アイランドの戦いについてWhitmanが書いた*The Brooklyn Standard*, 1861-1862の記事が収録されている。
 - 13) 吉崎, pp. 129-143.
 - 14) Justin Kaplan, *Walt Whitman: A Life* (New York: Simon & Shuster, 1980), p. 262.
 - 15) Kaplan, p. 262.
 - 16) Kaplan, p. 89.
 - 17) Horace Traubel, *With Walt Whitman in Camden* (Boston: Small, Maynard & Co., 1906), I: 13.
 - 18) "Origins of Attempted Secession," *The Collected Writings of Walt Whitman: Prose Works 1892*, ed. Floyd Stovall (New York: New York Univ. Press, 1964), II: 431.
 - 19) "A Backward Glance O'er Travel'd Roads," *Collected: Prose*, II, 724.

判することもできよう。またこれは勝者であるWhitmanの楽天的ことばにすぎないということもできよう。しかし「同質となった連邦の真の誕生」こそ、Whitmanのナショナリズムの一応の勝利の声明であると考えてるのが妥当ではないだろうか。ただし「単一のアイデンティティ」を掲げる連邦を長年賛美し、分裂した連邦の回復のための戦いを鼓舞した「アメリカの詩人」の宿命は、彼自身が戦場の後方で戦いの不条理に苦悩し無数の死者を見送るという大きな代価を支払ったうえで苦渋に満ちた勝利を賛えることであった。

註

- 1) Whitmanの習作詩については、吉崎邦子『ホイットマン——時代と共に生きる』（東京：開文社出版，1992），pp. 17-38。
- 2) 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』（東京：研究社，1970），pp. 19-24。
- 3) 吉崎，p. 31。
- 4) Preface to *Leaves of Grass, The Collected Writings of Walt Whitman: Leaves of Grass: Comprehensive Reader's Edition* (New York: New York University Press, 1965), pp. 709-710.
- 5) Randall Jarrell, "Some Lines from Whitman," *The Americanness of Walt Whitman* ed. Leo Marx (Boston: D. C. Heath, 1960), p. 119. 吉崎，pp. 130-31.
- 6) Preface to *Leaves of Grass*, p. 718.
- 7) Whitmanのメキシコ戦争関係の記事については、Gay Wilson Allen, *The Solitary Singer* (New York: New York Univ. Press, 1955), pp. 82-87およびThomas Brasher, *Whitman as Editor of the Brooklyn Daily Eagle* (Detroit: Wayne State Univ. Press, 1970), pp. 85-92.
- 8) 南北戦争終結から7年後の1872年に発表された“Virginia—The West”をここで取りあげるのは、第2グループの詩が持つ内容やトーンと距離があるからだ。Whitmanが1881年、“Drum-Taps”詩群の前の方にこの詩を入れたのも、これが戦争の初期と中盤の状況であると判断したからであろう。
- 9) 「悪党権力説」については、山本幹雄『南北戦争—その史的条件』（京都：法律文化社，1963），pp. 11-14。
- 10) “By Blue Ontario’s Shore,” 12節で，“the secession war”が使われているが、この部分は戦後付け加えられており、北部の論理からと言うよりは、勝者の史観と考えられよう。次に挙げるWhitmanの南部悪党説は、当時のもっとも代表的考え方である。
As to the inception and direct instigation of the war, in the south itself, I shall not attempt interiors or complications. Behind all, the idea that it was from a resolute and arrogant determination on the part of the extreme slaveholders, the Calhounites, to carry the states rights’ portion of the constitutional compact to its farthest verge, and nationalize slavery, or else disrupt the Union, and found a new empire, with slavery for its corner-stone, was and

manにとって、南北戦争がこのような経済的、人道的、政治的意味を持つものであったならば、詩のなかでは南部の論理に対する北部の論理が大義として述べられたはずである。本論文で扱った詩には、南北戦争の原因の一つであった奴隷問題については一切言及がない。Thoreauが奴隷制廃止論者であったのとは対照的に、Whitmanは奴隷制度に反対の立場をとったが廃止論者ではなかった。¹⁶⁾ Whitmanは*Leaves of Grass*や1850年代の新聞記事で黒人奴隷について言及はしたが、奴隷制度廃止の主張はしていない。Whitmanにとって南北戦争とは、彼自身が後に述べたように、奴隷解放のための戦いではなく、「一つのアイデンティティ」¹⁷⁾としての連邦復元のために「結束する」戦争であった。

戦争の回想録である“Origins of Attempted Secession” (1876)において、Whitmanは自由州と奴隷州の複雑な政治的背景を挙げた後で、南部の州権論による連邦離脱が連邦崩壊、自由と平等の破壊に発展したかもしれなかったと次のように分析した。

(If successful, this attempt might—I am not sure, but it might—have destroy'd not only our American republic, in anything like first-class proportions, in itself and its prestige, but for ages at least, the cause of Liberty and Equality everywhere—and would have been the greatest triumph of reaction, and the severest blow to political and every other freedom, possible to conceive. Its worst result would have inured to the southern States themselves.)¹⁸⁾

戦争が終結して20数年後、Whitmanは回顧録、“A Backward Glance O'er Travel'd Roads” (1888)に戦争の苦悩と絶望を綴りながらも、連邦と自由を死守した「脱退戦争」を次のように高く評価した。

... *the cause*, too—along and filling those agonistic and lurid following years, 1863-'64-'65—the real parturition years (more than 1776-'83) of this henceforth homogeneous Union.¹⁹⁾

とりわけ1863年から1865年までの歳月は、苦痛に満ちた恐ろしい年月であったが、この戦争は「同質となった連邦の真の誕生」をもたらし、対イギリスとの独立戦争にもまさる大義があったと彼は積極的に言う。連邦を真に同質の有機体に変えたのは「脱退戦争」であったと言うWhitmanの態度、特に「同質になった」という確信は、勝者である連邦〔北部〕のおごりや思い込みであると批

文化・人種の多様性，民主主義を詩に表現したと考えるのが一般的である¹³⁾。しかしもう一步踏み込んでいえば，次の引用に明らかなように，Whitmanはつねに個々の州が結集した統合体としての連邦のアイデンティティを意識していた詩人といえよう。言い換えれば，「アメリカの詩人」とは連邦のアイデンティティを表現できる詩人である。

Singing the song of These, my ever-united lands—my body no
more inevitably united, part to part, and made out of a thou-
sand diverse contributions one identity, any more than my
lands are inevitably united and made ONE IDENTITY;
 (“Our Old Feuilleage”)

多様性を抱えるアメリカが国家として機能していくためには，連邦という「ただ一つのアイデンティティ」を強烈に持たねばならないのだ。Whitmanの伝記作家Justin Kaplanは，Whitmanを「最初から加熱した連邦愛国者」と描写するが，彼が「連邦愛国者」であることが一層判明するのは，彼のナショナリズムが南北戦争時に連邦分裂という試練を受けた時である¹⁴⁾。

Whitmanにはアメリカの正義を守るための闘争を呼びかける詩がいくつかある。“Song of the Open Road”の14節は，目指す目的地に到達するためには「闘争と戦争」をくぐり抜けなければならないと闘争を呼びかける。また1860年に出版され後に1871年，“Drum-Taps”詩群に収録された“Not the Pilot”では，Whitmanはやがて起こる南北戦争を予期するかのように「合衆国のために進軍の歌」を歌い，今後必要があれば武装を促す戦いを呼びかけると宣言している。彼の頭には一貫して「合衆国のために」という大義，愛国心がある。“By Blue Ontario’s Shore”の数節は，南北戦争後の1867年に付け加えられたが，Whitmanが「脱退戦争で連邦の誇るべき勝利をらっぱのように」 (“By Blue Ontario’s Shore,” 12) 鳴り響かそうとするのは，連邦の維持には戦いが必要であることを知っているからである (“By Blue Ontario’s Shore,” 1)。Whitman自身は兵士になって「他の人間に銃を向けたり，剣で切りつける自分は考えられない」と言ったが，それでもなお民主主義と連邦の維持には闘争もやむをえないと考えていたようである¹⁵⁾。

南北戦争の原因には建て前説と本音説がある。前者は19世紀の「悪党権力説」であり，後者は20世紀に言われ始めた地域間の利害の対立と主導権争いであり，北部近代資本主義と南部非近代産業の対立，奴隷制度をめぐる自由州と奴隷州の対立，議会での北部議員と南部議員の主導権争いなどであった。Whit-

ていると言えよう。独立戦争の敵は連邦の外側にあり、Whitmanは躊躇せず敵の堂々とした姿を描く。

*Drum-Taps*と*Sequel to Drum-Taps*の詩のうち、いくつかの詩が別の詩群に編入されたが、この“The Centenarian’s Story”は、語句などの変更は多少あったが、最初から臨終版まで“Drum-Taps”詩群に入っていることから、Whitmanの意図が汲みとれよう。イギリスから自由と独立を勝ちえた独立戦争は、アメリカにとっては正義の戦いであった。Whitmanが南北戦争のコンテクストのなかでその連邦にとっての正義の戦いを再現させたことは、彼がこの内戦は、連邦を維持するためにはやむをえない正義の戦いであると考え、この連邦脱退戦争を正当化していると解釈できよう。「南北戦争」という日本語訳は、北部と南部の対立・武力闘争という誤解を生みやすい。上述のように北部は連邦を代表するから、北部の人間であり、かつ全体のアメリカの詩人を自認していたWhitmanにとっては、この戦争は連邦という国(the Union)を回復するための戦いであった。

この点では連邦を維持するというWhitmanのナショナリズムは、いささかも以前と違ってはいない。もし彼が純粹に北部人としてこの内戦をとらえていれば、南部を「敵」として描くことにためらいはなかったはずである。しかしこれまで統合体としてのアメリカを賛美してきたWhitmanは、連邦の基礎を揺るがすことになった脱退した11州を「敵」として正面から攻撃できない。南部11州を「敵」として糾弾することは、彼のスローガンである連邦を自らの手で解体するという罫にはまることである。“Drum-Taps”詩群の好戦的詩のなかに、戦うべき「敵」が完全な姿を表さないのはこのためである。

初版のナショナリズムが、ほとんど無疵の形で理想の連邦像を表現しようとしているのに対し、“Drum-Taps”詩群の愛国的な響きには、体内に病巣をかかえたアメリカへのWhitmanの複雑な思いがにじみ出る。南部も連邦の一部であるから、病んでいるのは連邦であるということだ。腫瘍のできた痛む腕は、腕を切断すれば病巣も苦痛も解消されよう。しかし片腕を失った体は、もとの肉体ではなくなるように、連邦はその一部である南部を自ら切り捨てることはできない。Whitmanにできることは、打開策として、病巣をかかえる連邦を徹底的に支持し擁護すること、そして連邦の正義を高く掲げることが、病巣である南部を制圧することになる。

このWhitmanのナショナリズムには、現実の分裂するアメリカを目にしつつ、なおも連邦のヴィジョンを掲げ、「ただ一つのアイデンティティ」という連邦の大義を前面に出さざるをえない彼のジレンマが感じられる。ふつうWhitmanをアメリカ的な詩人という場合、新大陸の自然と風土、アメリカ人気質、

As I talk I remember all, I remember the Declaration,
It was read here, the whole army paraded, it was read to us here,
.....
A few days more and they landed, and then the battle.
Twenty thousand were brought against us,
A veteran force furnish'd with good artillery.

I tell not now the whole of the battle,
But one brigade early in the forenoon order'd forward to engage
the red-coats,
.....
The British advancing, rounding in from the east, fiercely playing
their guns,
That brigade of the youngest was cut off and at the enemy's
mercy.

(“The Centenarian’s Story”)

古老が語る独立戦争のブルックリンでの負け戦は、語り手「わたし」に深い感動を与える。南北戦争という時代に生きる「わたし」は、ブルックリンという空間を介して、古老が語る独立戦争の戦いの一つを共有する。連邦側の二人と、アメリカの歴史上もっとも重要な二つの戦争は、今ここにブルックリンの地で「わたし」の心のなかで重なり合い、あらためて「わたし」にこの「連邦脱退戦争」の大義を認識させる。若者の流血のうえに独立を勝ち得た祖国の詩人として、「わたし」はブルックリンの価値を再認識し、それを人々に伝えることを決意する。

この詩はアメリカが経験した二大戦争を題材にしているが、客観的に見れば、「わたし」が語る現在の連邦軍の連隊の描写より、古老の語る独立戦争の敗北した旅団の部分の方がはるかに量的に多い。しかし、この作品と同様、少年と物真似鳥の二つの語りから成る“Out of the Cradle Endlessly Rocking” (1859)において、少年と物真似鳥の語りも内容的にも詩的効果の点でも車の両輪であったように、この“The Centenarian’s Story”でも、「わたし」と古老の語りは質的に等価値を持つ。古老が参戦した独立戦争の輝かしい連邦の精神と思想は、ブルックリンという北部の地で、現在の「わたし」に受け継がれるのだ。この詩では自由と連邦の擁護という大義は直接掲げられないが、独立戦争の大義はまさにそれであったから、詩の底辺にはやはり公的大義が脈々と流れ

終結後に書かれたせいも、詩のトーンには勝者のゆとりが漂い、あからさまな好戦詩ではない。「全体の母」は、かつての同士である「気高い父」を「反逆者」と呼ぶが、すぐに「静かな口調で」この父を諫めており、身内のいさかいの域を出ていない。したがってヴァージニアは、普通にいう「敵」とは言えないだろう。

北部の都市であるマンハッタンがあたかもアメリカを代表するかのようになり、またこの戦争の大義と正義は、ヴァージニアではなく連邦側に立つWhitmanにあると読者に思わせるのは、Whitmanの多弁で熱っぽい公的口調が、初版の序文や“By Blue Ontario’s Shore”などで歌われたナショナリズムの延長線上にあるからではないだろうか。しかし「緻密な有機体である連邦」としてのアメリカを理想の姿として掲げたWhitmanのナショナリズムは、南北戦争勃発で無傷では済まなかった。上に挙げた詩のなかに見られる大義は、危機に見舞われた連邦の大義であり、Whitmanはかろうじて「アメリカの詩人」という立場を維持するのだ。

III

非常に好戦的で公的大義のトーンにもかかわらず、敵の不在または曖昧さが目につく第1のグループの詩のなかに、アメリカが強敵を相手に戦った過去の戦争を南北戦争の枠組みの中で語る詩がある。現在の南北戦争の次元に、強敵と戦った過去の戦争の正義と大義が巧妙に復元されるのだ。“The Centenarian’s Story” (1861-2?)は、Whitmanの南北戦争観を知るうえで、非常に重要である。¹²⁾語り手「わたし」は、ブルックリンのワシントン・パークで独立戦争時に勇敢に戦った百歳の古老に手をかしながら、連邦軍〔北部〕の連隊の教練と行進を見下ろしている。この古老は85年前に若者として独立戦争(1775-83)に参戦し、生き残った元義勇兵である。古老は彼の連隊が敗北した話を感動的に語る。このブルックリンこそ初陣の若者2千人が精鋭の2万のイギリス軍により虐殺され、彼の所属していた将軍が敗北し、川を渡って撤退した場所である。古老の語りは、以下に示すように、85年前の戦場の光景とは思えないほど、具体的で生々しい。

As eighty-five years a-gone no mere parade receiv’d with applause
of friends,
But a battle which I took part in myself—aye, long ago as it is, I
took part in it,

.....

1860年、Lincolnの当選とともに南部の7州が連邦から脱退し、南部盟邦を組織したことに對し、Lincolnは1861年の大統領就任演説で、各州は憲法より古い連邦の維持を誓ったので、州には連邦から脱退する権利はないと述べた。1861年4月6日南部盟邦によるサムター要塞攻撃で、南北戦争は始まったが、連邦〔北部〕からいえば、この戦争は州が連邦から脱退するのを阻止するため、つまり連邦維持のための戦争という一面もあつた。脱退した南部の11州は、連邦に反逆したことになり、連邦を構成する州（主に北部）と戦うことになった。したがって連邦〔北部〕から見れば、連邦を脱退した南部盟邦に戦争の大義はない。北部は南部と戦い、南部を連邦に復歸させ、連邦を回復せねばならないのだ。したがって上記の“Virginia—The West”において、Whitmanが南部側のヴァージニアを余裕といくばくかの好意を持って責めるのは、この「連邦脱退戦争」の正義と大義がどこから見ても連邦〔北部〕側にあるからにほかならない。

第1グループの詩のもう一つの特徴は、敵の不在もしくは敵のあいまいさである。上に挙げた詩，“First O Songs for a Prelude”は、不思議なことにその好戦性とはうらはらに、読者に敵の不在を印象づける。もしこの詩が別の詩群にあると仮定すれば、「南からのニュース」にマンハッタン全体が、激昂したという一行だけでは、マンハッタンの戦う相手が南部盟邦であると推定するのは困難である。武装する町とそれを煽るWhitmanの好戦的で愛国的口調からは、マンハッタンの具体的な敵のイメージは見えてこない。戦争の発端が「南からのニュース」にあり、それに激昂してマンハッタンが決起したことは、かろうじて戦いの動機を伝えるだけである。また南北戦争が始まった1861年という年をそのまま表題にした詩“Eighteen Sixty-One”においても、青い軍服の北軍が「武装」し「闘争」する年として1861年が語られるが、ここにも「闘争」の相手である南部は影もかたちも見えない。

“Drum-Taps”詩群で、戦う敵が具体的な姿をとる詩がないわけではない。上述の“Virginia—The West”がそれで、青い軍服の息子〔若者〕が進軍する相手は、「狂気の刃」を振り回すヴァージニアであるから、たしかに連邦軍〔北部〕の敵は姿を見せたといえる。しかし敵であるヴァージニア州は、この短い詩のなかでは「敵」として、すなわち、生死をかけて戦う相手として描かれてはいない。ヴァージニアは二面価値、つまり、「全体の母」である連邦の立場からは、連邦を脱退し南部盟邦に加入した反逆者という負の価値と、Whitmanの評価では、アメリカ独立戦争時に指導的役割を果たした「気高い父親」の「不運」という減点つきの正の価値も有する。母親と父親と息子の関係は、婚姻と血縁の関係であり、母親と息子にとってこの父親は完全な敵にはなりがたい。戦争

戦争賛歌は、大義のもと一層戦いの輝きと効果を増すものである。前線に出陣する兵士の士気を高め結束を強化し、後方に残る家族に忍従と協力を強いるためにも、ふつう戦いには大義が必要である。兵士とその家族に理性的、感情的に訴える力が強い大義ほど、その戦いは正義の戦いや聖戦となる。“Virginia—The West”は、そのような大義をさり気なく描いた詩である。アメリカ独立戦争時にマサチューセッツ州とともに、重要な役割を果たし連邦を築いたヴァージニア州は、また独立革命の英雄で初代大統領ワシントン⁸⁾を輩出したことでも知られるが、この詩はそのヴァージニア州が南北戦争時に連邦を脱退し南部盟邦に加入した行為⁸⁾について書かれた。父親として描かれるヴァージニア州が、「狂気の刃」を全体の母〔連邦〕に振り上げ威嚇したことに對し、青い軍服〔北軍〕の息子たちが進軍し、「全体の母」が静かにこの父を諫める。ここにはこの戦争が統合体であるアメリカに反逆した州を懲らしめるという連邦〔北部〕の大義がある。

Then the Mother of All with calm voice speaking,
As to you Rebellious, (I seemed to hear her say,) why strive
against me, and why seek my life? (“Virginia—The West”)

日本語の「南北戦争」は、“the Civil War”（内戦）の意識である。戦争後19世紀末ごろまで、この内戦の原因は地域的視点から解釈される「悪党権力説」（Devil Theory）が一般的であった。北部が、連邦の分解こそ南部陰謀の目的であったと、南部の悪党権力説を言えば、南部は、意図的な奴隷制全面廃止論、議会における反南部活動、南部追込みこそ北部の陰謀であったと、北部悪党権力説で応酬した。したがって北部は、この内戦を連邦に対する南部の“War of Rebellion”⁹⁾ととらえ、南部は州権防衛の“War between the States”あるいは“War for Independence”と主張した。

この戦争はまた北部側から“War of Secession”とも呼ばれた。Whitmanがこの戦争を地域的偏見を含まない“the Civil War”と呼ばず、“the Secession War”（連邦脱退戦争）と呼んだことは、Whitmanの南北戦争観を知るうえで非常に興味深い。Leaves of GrassではWhitmanは「アメリカの詩人」のスタンスをとっているから、上記の北部の立場を主張した詩はほとんど見あたらないが、散文では“the Secession War”という表現がしばしば使われ、上記の南部悪党説も記されていることから、彼が個人的には北部側の論理に立ってこの戦争をとらえていたことが判明する¹⁰⁾。むろん当時の多くの北部人にとって、北部と連邦の立場を使い分けることはむずかしかった。

合わせからなる。隅々に響きわたることがその任務である太鼓とらっぱは、有無を言わせず、すべての人に日常の仕事を捨てさせ、関心をこの音に向けさせる。

Beat! beat! drums!—blow! bugles! blow!
Make no parley—stop for no expostulation,
Mind not the timid—mind not the weeper or prayer,
Mind not the old man beseeching the young man,
Let not the child's voice be heard, nor the mother's entreaties,
Make even the trestles to shake the dead where they lie awaiting
the hearses,
So strong you thump O terrible drums—so loud you bugles blow.
 (“Beat! Beat! Drums!”)

上述の詩“First O Songs for a Prelude”では、Whitmanはマンハッタンの町のすべての人々が、職務を放棄し進んで武装したと誇らしげに証言したが、それが必ずしも自主的行為ではなかったことをこの詩は示している。太鼓とらっぱの音は、人々の心と思考と行動を強制的に支配し、戦争の論理を押しつけ、判断力を麻痺させる魔力を持つことがわかる。だが太鼓とらっぱが、騒々しく人を煽るだけで、この詩では敵は姿を現さない。

どの時代のどの戦争でも戦争賛美は、特に戦争初期に、殺戮行為を正当化するために政治的に作られることが多い。Whitmanは「戦いを告げる太鼓こそ」彼にふさわしく、「血を流す戦いの歌」こそ、今の彼の歌であると宣言し戦いを鼓舞する (“City of Ships”)。詩人と長旗と子供と父親の4者のダイアローグである“Song of the Banner at Daybreak” (1861-2?)においても、マンハッタン生まれの多弁な詩人 [Whitman] と夜明けの空に翻る旗が、戦いを美化し無垢な少年に大義を語って聞かせる。人々が風にはためく旗のもとで戦う大義は、「自由」のためであり、38州が形成するアイデンティティのためである。

I hear the jubilant shouts of millions of men, I hear Liberty!
.....
Sweeping the whole I see the countless profit, the busy gatherings,
earn'd wages,
See the Identity formed out of thirty-eight spacious and haughty
States, (and many more to come)
 (“Song of the Banner at Daybreak”)

Incens'd struck with clinch'd hand the pavement.

(“First O Songs for a Prelude”)

Whitmanはマンハッタンの町が、軍鼓の響きにこたえて、いかにすばやく武装し出陣したかを熱っぽく語る。マンハッタンのあらゆる職種の男たちが——労働者たち、弁護士、判事、御者、店員、店主、会計係など——職場を離れ、集合し武装しはじめる。町が行動を起こしたさまは、動物が「襲いかかる」ようであった。町中が武装した兵士、連隊であふれかえり、太鼓が鳴り響く。教会の尖塔からも、公共の建物から、店舗からも旗が掲げられる。ここにはマンハッタンが熱狂に包まれた様子が非常に生き生きと語られる。

The tumultuous escort, the ranks of policemen preceding, clearing the way,

The unpent enthusiasm, the wild cheers of the crowd for their favorites,

The artillery, the silent cannons bright as gold, drawn along, rumble lightly over the stones,

.....

War! an arm'd race is advancing! the welcome for battle, no turning away;

War! be it weeks, months, or years, an arm'd race is advancing to welcome it.

(“First O Songs for a Prelude”)

上記引用部分は、この詩のなかでも特にWhitmanの心情の好戦的側面を表した部分である。Whitmanの好戦的傾向は、すでにメキシコ戦争時(1846-48)に彼が書いた新聞記事や社説に明らかであるが、南北戦争は彼のこれまでの42年間の人生で、もっとも身近にまた強烈に体験した戦争であった。⁷⁾「ほとぼしり出る熱狂」、武装と出陣の慌ただしさ、人々が熱病に冒されたようにあげる歓呼、大砲の行進、涙の別れ、戦争を歓迎する高揚した気持ち、男らしいりりしさ。これらは戦争勃発直後のWhitmanの心情と彼の町マンハッタンの様子であるが、あれほど全体としてのアメリカを歌ったWhitmanが、国を二分しようとする戦争に熱狂するのはなぜだろうか。

同じく1861年9月に発表された詩、“Beat! Beat! Drums!”も、好戦的な軍歌である。「太鼓よ、響きわたれ、らっぱよ、鳴りわたれ」と、人々の気持ちを鼓舞するこの詩は、太鼓の強強のリズムとらっぱを想起させる弱弱強のリズムの組み

たがって、*Leaves of Grass*に見られる彼のナショナリズムは、詩的世界の基盤として重要であった連邦を統合し、「融合」させることを目的としたヴィジョンの次元にあるといえよう。そしてWhitmanはこの「連邦」の大義である自由と平等を歌う「アメリカの詩人」であった。

II

アメリカの現実をジャーナリストとして観察し分析した結果、失意と怒りの政治詩を書いていた習作時代を経たWhitmanは、1855年から1860年の*Leaves of Grass*では、依然として連邦の重要課題であった内部対立という現実を直接描かず、「アメリカの詩人」として、詩的世界にアメリカのヴィジョンを確立しようとしていた。しかし南北戦争勃発により、彼のナショナリズムは、少なからず影響を受けることになった。ここではWhitmanの南北戦争観と戦争を題材にした愛国詩を分析する。

臨終版の“Drum-Taps”詩群の43編の詩は、内容、執筆時期から考えると、南北戦争勃発時のWhitmanの感動を描き戦争を鼓舞する詩のグループと、Whitmanが観察した戦場やワシントンの陸軍病院における戦争の現実とそれにより引き起こされた彼の複雑な感情を描いた詩のグループに分類されよう。第2のグループに比べ、数の点ではるかに少ない第1のグループの詩を本論文で扱う理由は、これらが南北戦争勃発時と中盤時にWhitmanが詩に表現したナショナリズムの本質を解明するうえで、重要なカギになると思われるからである。第1のグループの詩に見られる特徴は、好戦的態度、戦争賛美、公的大義、敵の曖昧さなどである。

“Drum-Taps”詩群の冒頭に置かれた詩，“First O Songs for a Prelude”は、その特徴のほとんどすべてを含む。詩は非常にうわずった調子で始まる。

First O songs for a prelude,
Lightly strike on the stretch'd tympanum pride and joy in my city,
How she led the rest to arms, how she gave the cue,
How at once with lithe limbs unwaiting a moment she sprang,
.....
How you sprang—how you threw off the costumes of peace with
indifferent hand,
.....
At dead of night, at news from the south,

Sailing henceforth to every land, to every sea,)

.....

We dwell a while in every city and town,

We pass through Kanada, the North-east, the vast valley of the
Mississippi, and the Southern States,

We confer on equal terms with each of the States,

(“On Journeys through the States”)

この詩に「多様なものの調停者」(“By Blue Ontario’s Shore,” 10)として、Whitmanに特徴的な、個々を全体に位置づけすべてを包含する傾向を指摘することもできよう。あるいは「時代と国土に平等をもたらす者」として、Whitmanが魂と肉体、生と死、男性と女性、東洋と西洋などの二極に優劣をつけず、等価で評価した同じスタンスを見出すこともできよう。しかし南北戦争直前の1860年、Whitmanが当時経済的、政治的、奴隷制でも対立していた北部と南部を、また保護関税の設定、西部開拓による土地問題、中央銀行と地方銀行などの問題で対立が激化していた東部と西部を、あえてその詩的世界で同等化しようとするのは、連邦を「緻密な有機体」として維持するためであった。

もう一つの詩でも、Whitmanは同じように南北戦争勃発直前の1860年、当時表面化していた北部と南部の対立をまったく意に介さないかのように、ヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、ミシシッピ、アーカンソーなど、後の南部盟邦の主要な州を列挙し、南部の人々と交流する彼自身を無造作に想像してみせた(“Starting from Paumanok,” 14)。長年ジャーナリストであったWhitmanが、北部と南部の対立に気づけなかったはずはなく、むしろ現実に連邦が分断の危機にあることを予感していたからこそ、彼は「アメリカの詩人」として、北部と南部の平等で友好的な関係を熱心に強調するのではないだろうか。Whitmanの詩的ヴィジョンの一角を占める「もっとも偉大な」共和国の未来のために、彼は北部、東部、南部、西部を分離させまいと、連邦のアイデンティティを維持する使命感にかられるのだ。

以上考察したように、特に南北戦争直前の詩に見られるWhitmanのナショナリズムは、現実の政治的、経済的統一体としてのアメリカの実相を直接に表現するものではなかった。彼は1860年のアメリカ社会の現実を詩のなかで率直に語る代わりに、1855年に掲げた合衆国連邦とその民主主義を詩的素材として、あるべきアメリカの理想の姿を懸命に歌おうとする。彼の詩的世界において、アメリカを理想の連邦にすること、その民主主義を実践し信頼することが彼の使命であり、南北戦争前の詩に見られるWhitmanのナショナリズムである。し

アメリカ合衆国連邦の突出した一地域ではなく、西部を東部と同様に、南部を北部と同様に、つまりアメリカの全体を平等に歌うというWhitmanの声明は、連邦内部のバランスをとるためであることは、容易に想像のつくことであり、アメリカを歌う詩人を自認するWhitmanとしては、当然の任務である。

The American bards shall delineate no class of persons nor one or two out of the strata of interests nor love most nor truth most nor the soul most nor the body most... [sic] and not be for the eastern states more than the western or the northern states more than the southern.⁶⁾

連邦は単に各地域、各州の地理的結合体だけではない。また「単一の構想」のもとに結合した政治的集合体だけでもない。Whitmanは全体としてのアメリカの概念にきわめて人間的要素を導入した。連邦であるアメリカと各地域（南部、北部、東部、西部）の関係は、次に挙げる“Starting from Paumanok”（1860）の4節の2行目と4行目に示されるように、血縁と愛情による結合である。

Take my leaves America, take them South and take them North,
Make welcome for them everywhere, for they are your own offspring,
Surround them East and West, for they would surround you,
And you precedents, connect lovingly with them, for they connect lovingly with you. (“Starting from Paumanok,” 4)

南北戦争直前の1860年、当時の緊迫した社会情勢のなかで、彼は「有機体」(organism)としてのアメリカ合衆国連邦を意識しているようだ。次に挙げる題詩群の“On Journeys through the States”（1860）に見られるように、彼を含む「わたしたち」が、合衆国の各州を順に旅するのは、各州と均等な関係を維持し連邦としての一体感を失わないためである。ここには習作の政治詩に見られた連邦をなしくずしにする国内要因に対するいらだちも怒りもなく、連邦のアイデンティティを諸州に再認識させようとする「アメリカの詩人」の決意が感じられる。

On journeys through the States we start,
(Ay through the world, urged by these songs,

版を重ねるごとにさまざまなテーマと要素を含む新しい詩が加えられた詩集 *Leaves of Grass* は、次第に初版と第2版のアメリカ的響きを弱めていったにもかかわらず、「アメリカは」で始まる *Leaves of Grass* 初版の序文は、良くも悪くも Whitman の詩人としての方向性と可能性を、そしてそれ以降の *Leaves of Grass* の性格を読者に強制した感がある。すなわち、Whitman はもっともアメリカ的な詩人であり、また年毎に拡張していった臨終版の *Leaves of Grass* は、Randall Jarrell や Haniel Long, Edward Dowden などの批評家に言わせれば、生粋のアメリカ産の作品であるということになる。⁵⁾

ジャーナリスト時代のあの感情をすっかり忘れたかのように、Whitman は翌年も序文の理念をそっくり “By Blue Ontario’s Shore” (1856) に再現し、諸州とその大衆、そしてアメリカの理念である平等と、アメリカの多様性が、そのまま「もっとも豊かな詩」になりうると感嘆するのだ。

These States are the amplest poem,
Here is not merely a nation but a teeming Nation of nations,
Here the doings of men correspond with the broadcast doings of
the day and night,
.....
Here the flowing trains, here the crowds, equality, diversity, the
soul loves. (“By Blue Ontario’s Shore,” 5)

アメリカの地理的、文化的個性などの表層部だけでなく、Whitman の詩的ヴィジョンはアメリカのアイデンティティを重要視する。国家として機能し、民主主義を推進するには、諸州が互いに「融合」し、一つの国として「緻密な有機体」を形成する必要がある (“By Blue Ontario’s Shore,” 9)。Whitman はその「確固として揺るがぬ連邦 (the Union)」とその単一の構想を歌うことで、アメリカにアイデンティティを与えようとする (“By Blue Ontario’s Shore,” 9)。

The haughty defiance of the Year One, war, peace, the formation
of the Constitution,
The separate States, the simple elastic scheme, the immigrants,
The Union always swarming with blatherers and always sure and
impregnable. (“By Blue Ontario’s Shore,” 6)

I

*Leaves of Grass*の出版以前、政治活動をしていたジャーナリストWhitmanは、現実のアメリカと彼が思い描く理想のアメリカにギャップを見だし、現実のアメリカ政治に怒りと幻滅を表した詩をいくつも残している。

Beyond all such we know a term
 Charming to ears and eyes,
 With it we'll stab young Freedom,
 And do it in disguise;
 Speak soft, ye wily dough-faces
 That term is "compromise." ("Dough-Face Song")

上記引用の詩は1850年にニューヨークの*Evening Post*紙に発表された“Song for Certain Congressmen”を改題した“Dough-Face Song”の一部で、奴隷制問題に関する議会の妥協政策に対する抗議である。一人称の「われわれ」は南部領主と妥協した北部の臆病な政治家のことである。Whitmanは、北部の政治家が原理や自由、大衆の権利を踏みにじり、次の世代への責任を回避して妥協したことに怒りを隠せず皮肉な口調でこれを書いた。これ以外にもジャーナリストWhitmanが書いた習作詩や記事には、民主党の政治への怒りと失望、アメリカの将来に対する不安と警告とが見られる。当時の彼のナショナリズムは、現実のアメリカの状況を生真面目に民主主義の原理で厳しく批判するという、青年らしい直情型の愛国心であるといえよう。

それから5年後、Whitmanは*Leaves of Grass*の詩人として世に出たが、この時点でWhitmanのナショナリズムは、大きく変貌を遂げている。依然としてアメリカ国内は政治的、経済的、人道的に揺れていたが、習作詩や社説に見られるアメリカの政治へのいらだち、怒り、失望はすっかり姿を消し、Whitmanは1855年明るく高らかに新しいアメリカ像を打ち出した。序文の冒頭でアメリカは、受容能力、寛大さ、理解力、「比類なき広大さ」と力強さを持つ「無比の国」として賛美された⁴⁾。彼はナショナリズムについて発想を180度転換したと言えよう。すなわちWhitmanは、詩の目的を現実のアメリカの醜い政治批判から、アメリカのヴィジョンを完成させることに移した。現実にはアメリカの混迷、地域対立などが深まりつつあったからこそ、彼はその現実ではなく、アメリカの進むべき方角としてアメリカのヴィジョンを高く掲げる必要があったのだ。

“Drum-Taps”詩群における Whitmanのナショナリズム

吉 崎 邦 子

Whitmanの詩的ヴィジョンの一角に明確に位置づけられる合衆国が、国を二分する南北戦争に1861年4月突入し、4年間の闘争と流血を経験したことは、Whitman文学にも大きな影響を与えた。ジャーナリスト時代のWhitmanは、戦争の前段階的状况を習作詩や新聞記事に書いたが、戦争に発展して以来、彼は志願して野戦病院¹⁾で傷病兵を看護し、戦争当初から終結までこの国家的悲劇を目撃し作品化した。

戦争勃発の1861年4月から、Whitmanが弟Georgeの安否をたずねヴァージニアに出発した戦争中盤の1862年12月までの状況を描いた*Drum-Taps*は、53編の詩からなり、戦争終結後の1865年5月に出版された。同年4月に暗殺されたLincoln大統領の死を悼む“*When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd*”を含む18編の詩集、*Sequel to Drum-Taps*が秋に出るが、この続編は間もなく*Drum-Taps*第2版に収録された。その後、“*When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd*”などが独立したり、いくつかの詩が別の詩群に移動した結果、現在の臨終版(1892)の“*Drum-Taps*”詩群は、主に南北戦争を題材にした43編の詩から成っている。

臨終版の“*Drum-Taps*”詩群は、戦争初期に書かれた好戦的で戦争賛美のトーンの詩と、戦争中期および後期に書かれた私的で沈痛なつぶやきの詩に分類されよう。この公的感情より私的感情が優先されている詩については、紙面の都合上、別の機会に譲るとして、この論文では「アメリカの詩人」を自負するWhitmanの根底にあるナショナリズムを、“*Drum-Taps*”詩群の愛国的詩を中心に考察する。(1)まず“*Drum-Taps*”詩群以前のWhitmanのナショナリズムについて論じ、(2)次に“*Drum-Taps*”詩群の好戦的で愛国的な詩の特徴を分析する。(3)最後にこれらの詩を書かせた「大義」を明らかにし、南北戦争初期におけるWhitmanのナショナリズムを解明する。